
円環のパラダイム(改訂版)

樋口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

円環のパラダイム（改訂版）

【Nコード】

N1040BA

【作者名】

樋口

【あらすじ】

改訂前の作品とは設定、展開が異なります。例としては、主人公が情緒不安定ではありません。自分なりに、ですが改訂前よりも大人向けの設定、展開を意識しております。

人のように考え、人のように動き、自律成長プロトコルにより

精神の成長すら可能とする、高度な人工知能の実現が叶う時代。

二十二歳という若さで名だたる著名画家の仲間入りを果たしている詩歌^{しいか}は、友人と喧嘩別れした帰りに道端で妙なものを拾う。

革製のアタッシェケースと、中に入った金属塊。

拾得物横領、と知りながらも、詩歌はそれを持ち去った。

そして翌朝。

「……何これ」

「それは僕の愚息さ！」

自宅のマンションで眠ったはずなのに、起きると男風呂にいた。混乱する詩歌と、いきり立つ男。

しかし更なる驚愕が詩歌を襲う。

「男になってる……！？」

「は？ 何を言ってるんだいミスウィート、僕が男以外を相手にするわけないだろう？」

「あなたは黙ってて！」

箱庭に閉じこもることを余儀なくされた近未来と、電子世界と呼ばれる未知の領域。

機械万能の時代が織り成す空想劇。

アダルト要素はありません。

改訂版第一章 “幸せの絵画” 一話

「いい加減にしてよ！」

そんな、怒気に満ち溢れた攻撃的な言葉と共に、ズワイガニが顔面に飛び込んできた。

間違いない、ズワイガニである。

隠喻でも詩的な表現でもない。

真正正銘のズワイガニだ。

フレンチ風に仕立ててあり濃厚なソースの絡んだソレを、対面に座る友人はむんずと豪快に手で掴み、遠慮容赦なく顔面目掛け投げつけてきた。

そして、顔面を直撃した。

投げつけるならパイにするべきだろう、と自分でも訳の分からない憤りを抱くほどに混乱していたが、友人の憤りはそんなモノではなかったようだ。

蹴飛ばすように椅子から立ち上がり、烈火の如く怒り狂った彼女が喚き散らす。

「私というのはそんなにつまんない！？　　ならはつきりそう言うてよ！！」

啞然とする他の客など知ったものかばかりに、濃厚なソースとカニの肉にまみれ、痛みでしかめっ面のこちらを責め立ててくる。哀れ、カニはワインレッドのカーペットが敷かれた床と、熱烈なベージュを交わしていた。

当のわたしは目をしばたたく。

「何を怒ってるの？　　楽しくないわけじゃないじゃない」

本当に分らないのだ。

竹馬の友である彼女と仕事の合間に待ち合わせ、予約していたレストランで杯を交わし、楽しく世間話に興じていたはず。

何がいけなかったのだろう。　　しかし、彼女はわたしの口に

する言葉ひとつひとつが気に入らない、とばかりに睨む。

騒ぎを聞きつけて駆けつけた従業員もわたし同様、どうしたらいいかわからないようで「お拭き致します」と、一先ず清潔な布巾でわたしの顔についた料理を拭き取ってくれた。

普段は厳かで格調高い雰囲気の店内がざわめき立つ中、わたしは一瞬にして注目の的になったいたたまれなさを噛み締めていた。

友人とてこの状況に思うところはあろうだ。

苦虫を噛み潰したようにしている。

暫し互いに無言で見つめ合ってから、ふいつと目を逸らして彼女は言う。

「……悪かったわ。また、誘って」 伝票を手に取り会計所へ歩き去っていく彼女。

ここの代金は持つ、ということだろう。

謝るべきはこちらかもしれないので申し訳なく感じたが、蒸し返してこじれたらことだ。

次はわたしが彼女の分も払おう、と心に決め、椅子から立ち上がる。

「お騒がせ致しました」

お腹の前で手を重ね、他の客達に向かって慇懃に一礼。

偶然目の合った客が会釈を返してくるのを目に、客の多くは何事もなかったように食事を続けるのが分かり、内心胸を撫で下ろす。

駆けつけた従業員にも丁寧に謝り、事なきを得た。

一張羅のドレスにまでソースが染み込んでいたが、この場を穩便に済ませられたなら安いものだ。 食べかけの料理に手はつけず、レストランを後にした。

わたしは、人によくこう言われる。

「あなたは上手い生き方をする」

何をもって『上手い』のかわからないけれど、現実と折り合いをつけてほどよい落としどころで妥協する、ということならそうなのだろう。

何かに固執して多くを失うくらいなら、わたしは堅実な一手を選ぶ。

だって、そうだろう？

迷信の中に生きるモグラは、日光を浴びたいと願うくらいなら、一生土の中で暮らす。

わたしはそのモグラだ。

そして、遠い先のことより目の前の問題をひとつずつ解決し、着実に歩む。

それが女という生き物だと思う。

夢見がちな男とは対照的な生き物だ。

だから、モグラで女のわたしは、夢を見ない。

きつと、それが利口なのだ。

イルミネーションとライトアップに彩られ、きらびやかな繁華街。

人や車が忙しく行き交い、雑多な喧騒で賑やぐ雑踏を歩く。

レストランから辞したあと、わたしはタクシーで帰るのをやめて、ぶらぶらと夜の街を彷徨っていた。

大きな通りに出て、人の流れに行き先を任す。

ドレス姿のわたしは繁華街で明らかに浮いていたけれど、然程気にならない。

幾つか駅の離れたマンションに帰り着くには結局、電車かタクシーを必要とするだろう。　　だけど今すぐに帰宅する気にはなれず、当てもなくぶらつく。

休日だからか、人通りが多い。

周囲は人で溢れ、個々の立てる足音が重なって耳に届く。

暫くのあいだ、車やバイクのエンジン音やら足音やらが奏でる合唱を楽しんでいると、不意に左肩を叩かれた。

何だろう、と一旦立ち止まって振り向く。

そこには沢山の歩く人と、彼らに紛れ、その場で立ち止まっている若い男がいた。

黒いスーツを着込むサラリーマン風の男で、左手に革製のブリーフケースを提げている。

彼の右手は肩に触れていて、振り向いたわたしに気づいて、さっと手を引いた。

「あの、織倉詩歌さんですよ？」 畏まって話しかけてくる彼に、わたしは目をしばたたく。

彼に見覚えがない。

しかし彼は本人だと確信しているのか、わたしの返答を待たず話す。

「俺、ファンなんです。まさかこんなところで会えるなんて！」

その言葉で疑問が氷解した。

新しいおもちゃを与えられた子供のようにはしゃぐ彼へどう対応しようか迷い、無難に微笑んでおく。

いつまでも立ち止まっているわたしと彼は人目を引いていて、喧騒に混ざって「織倉詩歌」やら「本物？」などと話す声が聞こえてきた。

「うわ、どうしよう。あ、あの」

彼はブリーフケースを開けてごそごそと中を漁り、ほどなくして鞆からサイン用紙を取り出す。 そして、

「これっ！ お願いします！」

直角に腰を折り曲げ、突き出した両手にサイン用紙を乗せ、差し出してきた。

営業先に自社の製品を売り込むみたく見事な一礼だ。

こうなると人目は更に増えて、いよいよ無視できない域に達しつつあった。

わたしは内心嫌な顔をしつつ、

「わかりました」

笑顔で外面そとづらを取り繕って頷く。

通行の邪魔にならないよう、男を引き連れて通りの端に退いてから、受け取ったサイン用紙に向き合う。

ポシェットの中をまさぐり、ペンが見つからなくて困っている
と「どうぞ」と、男がペンを差し出す。

感謝の言葉を述べて受け取ると、

「あの、もしよろしければ簡単な絵を添えていただけませんか？
本当に簡単なもので十分ですので」

図々しいことをお頼みして申し訳ありません、と男はなかなか板についた仕草で頭を下げる。

さつさと終わらせて立ち去りたいと思っていた為、その提案は意に反するものだった。

けれど真摯なお願いを一蹴するのも憚られ、遠回しに言って聞かせるくらいなら描いた方が楽だと思い「ええ、構いませんよ」と承諾してしまう。

頼まれると嫌とは言いつらい日本人の性さがか。

「ほ、本当ですか！　ありがとうございます！」　飛び上がるように喜び出す彼に愛想笑いを浮かべる。

これ以上人目を引く行動は慎んで欲しいのだが、と思うも口にはしない。

油性と表記されたペンを左手に握り、再びサイン用紙と向き合う。

芸能人ではないのだが、と心中愚痴りつつ手早くサインを済ませ、描画に取りかかる。

どう描いたものかと瞬間頭を悩ませて、サイン用紙に筆を走ら

す。

——小さな頃から、絵を描くのが好きだった。

家族が笑い合う光景も、怯えたように距離を置く妹と仲睦まじく遊ぶ場面も。

切望し、手に入れられなかった幸せを、平面上になら幾らでも生み出せる。その魅力の虜になったわたしは絵の世界に没頭し、そして今は画家として筆を取っている。

「……どうぞ」

「本当にありがとうございました！ 一生大事にします！」

男は爽やかな笑みを浮かべて感謝し、意気揚々と駆け去っていく。

そのさまをぼんやりと眺めていると男が突然立ち止まって後顧し、こちらに向けてぺこりとお辞儀した。

今度こそ駆け去っていくのを見届けながら、わたしは重苦しく息を吐き出す。

右から左へと絶え間なく流れる人波と、その奥に広がる四車線の車道から視線を持ち上げる。

見上げた藍色の空に高々と聳え立つ、ドーム状の巨大な建物。鼠色の体色を持つ建物は、数十キロ離れた距離と夜闇にあつてさえ、その威容を轟かす。

あの中にあるのは環境を調整する一大システムだ。核兵器の濫用と、制御を失った無人型自動兵器群により、箱庭へ引きこもることを余儀なくされたわたし達の、希望。

強烈な酸性雨が延々と降りしきり、強力無比な兵器の大群が徘徊する外の世界。

そこから隔離した箱庭の大気を整え、星辰を投射し、月の満ち欠けを模倣する。

それがあの建物の役割。

だから、ここは偽物で溢れている。

作り物の空、作り物の月、作り物の太陽。

実物はどれも人々の目から失われて久しく、わたしが目にする機会は恐らく生涯ない。——もう、帰ろう。

タクシーを呼ぶために目印となるところまで歩き出そうとする
と、

「……うん？」

上げた足が何かに触れる。

人波に背を向け、シャッターの降りた喫茶店と向かい合う。

先程まで背にしていた喫茶店から足元に視線を落とすと、そこには箱形のブリーフケースが屹立していた。

——さっきの彼が忘れたのかな。

ブリーフケースを持っていたことから持ち主と推測する。

しかし、よく見てみると細部のつくりや色が違うことに気づき、
おや、と思う。

それに、このブリーフケースの形状、色、材質、どこか見覚えがある。職業柄、視覚による空間認識能力は優れているため、一度目にしたものはそうそう忘れない。

あれでもない、これでもない、と記憶の糸を手繰り寄せている
と、ひとつ思い当たった。

——ああ、妹の。

実家から遠く離れたところで暮らしている妹。

妹の生活に不自由はないか、調査を秘密裏に依頼した探偵が持つてくる、調査書を入れたアタッシェケース。

それにそっくりなのだ。

——でも、どうしてここに？

訝しみつつも気になり、おもむろに手を伸ばす。

革製のそれはずしりと重く、中に相当の重量物があることを窺わせる。

片手では厳しいので両手に持ちかえた。胸の前で抱えてみて、やはり紺の色合いも手に伝わる革の感触も、記憶にあるそれとよく似ている。

施錠するための金具は見えていたから、開けられはしない。そう思っていたのだけど、無用心なことに解錠されたままだった。

道端のコンクリートに、鞆を一旦降ろす。

勝手に開けて申し訳ない、と心の中で持ち主に詫びてから、一思いに留め具を外す。

艶消しが効いた鞆の中には、ウレタン素材の緩衝材に挟まれている、無骨な金属の塊があった。

容量ぎりぎりで詰め込まれた鞆は、上部の先っちょだけ内装を露出させている。中身の金属と言えば、見事に鞆に沿った板状をしていて、この鞆に入るために生まれてきたかのような。

どんな存在理由だ、と自分に突っ込みを入れながら、鞆と中身をためつすがめつ観察する。

コンクリートの上で大口を開くアタッシェケース。

生憎と工学は専門外だからこれが何であるか、断定しきれない。最寄りの交番に届けるべきだろうか。

届けるべきなのだろう。

しかし、わたしはさも持ち主であったかのように、それを持ち去った。

拾得物横領、立派な犯罪だ。

けれどわたしは、例えば警察の縛についても構わないと思っていた。

もし供述書が書かれたら、こう書かれることだろう。――
発作的な犯行、と。

改訂版第一章 “幸せの絵画” 二話

中学に入学した年、わたしは父の書齋に呼ばれた。

日々の業務に忙殺される父にとって、娘ですら直々に会うことは珍事だ。

一体、何の用だろう、もしかしたら……。

その頃のわたしは、どうすれば両親が妹とわたしに目を向けてくれるだろう、と必死に考えていた。

だから、見込みの低いことはわかっていたけれど、淡い期待を抱いて書齋に入った。

学校の教室ほどはあるお座敷の奥で、古式ゆかしい羽織袴に身を包む父は正座し、肅として佇んでいた。

その斜め後ろには、花柄の着物姿が愛らしい妹も正座している。いまいち状況を飲み込めず、立ち尽くしているわたしに、父は座るよう命じた。そして、対面に正座するわたしを目に、父は肅々と告げた。

「今日この時から、お前達姉妹が馴れ合うことはまかりならん」

告げられた言葉の意味を理解するのに、数秒かった。

「既に優歌^{ゆうか}は了承済みだ」

真つ白の頭にもその言葉は染み渡り、愕然とした。

見開いた目で慌てて妹——優歌を見る。

能面のように無表情で佇む妹。

なんで、と叫びたかった。

しかし、無機物でも見るかのように見つめてくる妹に聞くのは躊躇われ、わたしはさすがの目で父に視線を戻す。

「これはもう決まったことだ。何より、優歌がそれを望んでいる」
返ってきたのは、感情の揺らぎを微塵も見せず、にべもない返

答。

絶望に唇をわななかせ、言葉にならない呻きが漏れる。
理由は、聞かなかった。

微睡みの中で夢を見ていた。

忘れられない、別離の日。

妹は息災だろうか。

もう、随分と会っていない。

段々と意識が浮上するのを感じ、夢の終わりを悟る。

そして――、

「やあ、目が覚めたかい？」

起きたら素っ裸の男に見つめられていた。

「っ……………！？」

衝撃の光景に瞠目し、かばっと上体を起こす。

「まったく、驚いたよ」

まず目に入ったのは、ひのきを削り出してつくったとおぼしき
浴場。

浴槽はなく、八畳ほどの広さ。

「驚いたよ、水浴びしようと風呂場に入ったら人が寝てるなんて」
そして次。

男にしては長い金色の髪を揺らめかせ、女性受けしそうな甘い
面貌をした、一糸纏わぬ青年。

「しかも僕好みの益羅男——ゴホンッ、こんなに逞しい人だ」
妄想で幻覚を見ているのかと思ったよ、と微笑みかけてくる男
を無視して、状況把握に努める。

しかし、あまりの不可解さに眩きが突いて出た。

「……………何これ」

「それは僕の愚息さ！」

考え得る限り最低の下ネタは聞き流し、辺りに忙しく視線を彷徨わす。

混乱していた。

昨日自宅のマンションで眠ったのが最後の記憶。夢遊病よろしく寝ぼけて徘徊でもしたのか、それとも夢の続きか。

なんて連続性のない夢だ。

明晰夢ならば思い通りにできるかもしれない、と思いつき、試しに裸の男が消えるよう全力で祈った。

最優先目標である。

「指を組み合わせ何て祈ってるんだい？」

消えなかった。

全身全霊で祈りを捧げたのに。

明晰夢という可能性を一度隅に追いやり、取り敢えず物理的手段で男を排除しようとして――、

「男になってる……！？」

身体の異常に気がついた。

「何を言ってるんだい、マイルスイート。僕が男以外相手にするわけないじゃないか」 全身が総毛立つ。

男の発言と、変わり果てた自身の姿に。

男でも稀な筋骨隆々の肉体。

筋肉達磨、とまではいかなくとも、骨太のがっしりとした体型であることは否めない。

見るだけでもごめん被りたいのに、それが自分の身体となっていた。

いや認めよう、姿形だけじゃない。

目の前の男から意識を逸らすために最初は本気で気づかなかつたが、声も女とは思えないほど野太くなっている。

頭を抱えようとして、丸太のように太い腕がちらつき、また身の毛がよだつ。

「あれどうしたんだい、顔色が――」

「あなたは黙ってて！」　ぴしやりと言い放ち、男を黙らす。

それでも、素振りからいきり立っているのが分かる。

深く考えないことにして、真相の究明に心血を注ぐ。

幻覚や催眠の類いか？

単に寝ぼけただけでは変貌の説明がつかないし、夢なら座して待つしかないだろう。

だけど、幻覚や催眠と言っても心当たりが――。

「あ……」

あの拾い物だ。

全身から血の気が引いていくのを感じた。

自宅に持ち帰ってから無謀にも弄くり回してみても、結局何の成果も得られなかった。

拾ったのは使い道を知っていたからではなく、気分れだ。

ただ、鬱屈してただけ。　代わり映えない日常を繰り返

していて、ある時、無性に普段と違うことをしたくなる。

そんな、単純な理由でしかない。

彼女とああったから、という衝撃が拍車をかけていたかもしれないなかった。

彼女は どうして怒ったのだろう。

あそこまで怒るなんてここ最近なかった。

わたしに、というなら初めてと言ってもいいくらいだ。

何が悪かったのか。

彼女とは十年來の付き合いで、人柄もお世辞抜きで好ましい。

仲直りできるといいのだが、と真剣に思うからこそ、今回のこ

とは堪えていた。

「どうかしていた」

心から、そう思う。

お縄についても構わない、なんて正気の沙汰じゃない。

まさかここまで大事になるなんて、という間抜けな感慨を自分が抱く日が来るとは。

気晴らし、という意味では持ち帰った時点で達成されている。何かが起こるなんて、望んじやいなかった。

本当にあの拾い物が原因なのか、真偽を断じることにはできないが、馬鹿なことをしたのは確かだ。

暫く自分の馬鹿さ加減に悶えて、ようやく人心地つく。

「落ち着いたかい」「……ええ」 頃合いをはかったように喋りかけられ、邪険な態度を崩して返す。

そして、佇まいを正した。

「ご迷惑をおかけしました。先程の不躰な言葉、お詫び致します」
「いやいや」

鷹揚に首を振る男。

その様子から興奮は霧散していて、彼も平静を取り戻したようだ。

向かい合うと嫌でも男の裸体が目に入るものの、謝罪するからには目を逸らすわけにもいかず、直視するしかなかった。

また、視線が随分と高くなっていて慣れない。

座っているからまだ既知の高さだが、立てばどうなることか。

膝立ちの彼よりも正座するわたしの座高が頭半分高いのだから、推して知るべしだろう。

「気分が優れないようだね。どうして我が家の風呂場にいたのか不思議だけど、ひとまず出ようか」

……ここは彼の家なのか。

わたしの事情に関係ないのなら、やらかしてしまった粗相もひとしおだ。

それはともかくとして、彼の申し出に頷き、案内を受けた。

さりげなく手を引かれているけれど我慢しよう。

掴まれた手の感触といい、あらゆる感覚が鮮明だけど、感覚を伴う夢もないわけじゃない。

彼に連れられて風呂場を出ると、脱衣場とおぼしき部屋が待ち構えていた。

石造りだろうか。

足元に敷かれている藁で編まれたシートは、素足の汚れを防ぐためだろう。

失礼な話だが、それらを見た時、わたしは驚愕を禁じ得なかった。

こう言つては何だが、現代では考えられないくらい、どれもこれもが古臭い。

また、シートの傍らには履き物が置いてある。

革靴を上履きにする習慣でもなければ、ここは洋館のように下履きで歩き回るつくりだろう。

「困つたな、服と靴を用意したいけど僕のじゃサイズが合わない」
内装や視点の高さに戸惑っていたわたしは、その言葉に凍りつく。

借りるだけとは言つても、服を要求するなど厚かましい話だ。

しかし、今のわたしは一刻、一分、一秒でも早く服を着てしまいたかった。

ある意味、女の肢体を晒すより羞恥が募るからだ。

死活問題を前にぎらつくわたしから背を向けて、洋服ダンスの中身を漁っている男が言う。

「大きめの服で何とか入るものを探すしかないか……。丈が短いだろうけど構わないかい？」

「ええ勿論」

即答だった。

「……信じられない」

衣服を借りて、不本意ながらも直に羽織るロングコートで妥協し、はち切れそうなズボンとサンダルを穿いたわたしは、外に出て

目を疑った。

剥き出しの地面に建てられた、石造りの建物の数々。

寒空の下、思い思いに過ごす人々。

見るものすべてが時代がかったいたからだ。

「何か物珍しいものでもあったかい？　ごくごく普通の町だと思うけど」

ぼそりと漏らした呟きに、男――モーホーはきよんととして答えた。

わたしと彼の見ているものに致命的な齟齬がないとするなら、わたしの見ている光景はごくごく普通らしい。

夢や幻覚なら納得できる話ではある。

しかし、それらが厳然と目の前にあると、やはり圧倒されてしまふ。

「ミルキーの町には慣れてないみたいだし、急いでなければ一通り案内しようか？」

「ええ、お願いします」

少しでも情報を求めていたわたしは頷き、彼に付き従う。

彼曰く、公式の場や畏まるべき相手以外に敬語を使う習慣はないそうだ。

敬語でなくていいとは言われたが、敬語をやめるとなると口調の問題に直面する。

女口調でいいではないか、とも思うけど、この見てくれで女口調は、とも思う。

悩んだ末に敬語が癖ということにしておいた。

「この町、ミルキーは内陸の山間部にあるんだ。町全体は球形をしていて、縦横無尽に道が走ってる」

町を練り歩きながら、男から説明を受ける。

彼は前開きのケープのような外套を羽織り、下に麻のズボンと動物の皮をなめした靴、という装いだ。

外套の中からは重ね着した麻の衣服が覗いている。

「今いるのは球形の真南。南門の近くだよ」

「南門、ということは東西南北に門があるのですか？」

「そうなるね——っと、最初の目的地はここだよ」

足を止めた彼が指で示す方に振り向く。

そこにあつたのは、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1040ba/>

円環のパラダイム(改訂版)

2012年1月3日12時45分発行